

漢字学習書各種アプローチの検討 (3)

— 「記憶術」によるアプローチ —

カイザー シュテファン

要 旨

漢字の学習・指導は伝統的には丸暗記や繰り返し書く方法で行われてきた。しかし、一方ではいわゆる形・音・義など個々の要素による記憶法、またはその組み合わせによりいろいろな方法が考案されてきた。そういった方法の主なものを以前7つのタイプに分類してみたが、本稿ではその中で第3のタイプをとりあげる。この方法は漢字の形・義を漢字の構成要素の分析・再構築によって記憶するが、その際、伝統的西洋の記憶術による語句・覚え話・イメージ化を利用する。英語など媒介語による方法が使われてきたが、日本語を使うことによって、漢字の「音」の情報もある読み込む試みも行われている。

西洋における伝統的な記憶術は古代ギリシャ・ローマに遡るが、現在でも記憶改善を目的とする本などで生きている。一方、中国などでは伝統的に韻文による学習法があり、漢字の学習にも使われた。その影響によるものか、日本の小学生向けの五七五調による覚え話もある。

1970年代から研究対象となった、外国語語彙学習のための「キーワード法」も検討し、漢字学習の記憶術との関連を検討する。

【キーワード】 漢字学習 記憶術 覚え話 キーワード法 イメージ化

Approaches to Kanji Learning (3) :

mnemonics-based approaches

Kaiser, Stefan

The study and teaching of kanji in Japan and abroad has traditionally relied on rote learning and repeated copying of kanji. However, to facilitate the learning of kanji, a variety of ways of memorizing them on the basis of their shape, sound or meaning have been proposed. Having previously divided the major approaches into 7 types on the basis of their characteristics, this paper examines in detail type 3, which largely relies on analyzing a kanji into its component parts, assigning a meaning to each part, and then reassembling the kanji to aid memorization by relating the meaning of the parts to the meaning of the whole in some form, and/or forming these parts into some imagery.

The art of memory (now known as "mnemonics" or "mnemotechics") originated in ancient Greece and was embraced by the Romans. Its influence is still alive in 20th century books for improving memory. In China and Japan, kanji were traditionally learned in verse form, which has had some influence on contemporary approaches.

The "keyword method", which became an object of research in foreign language vocabulary learning from the 70s is also reviewed, and its connections with kanji mnemonics are examined.

1. はじめに

漢字の学習・指導は日本・海外ともに伝統的には繰り返し書く練習を中心に行われてきた。しかし、漢字のいわゆる形・音・義を記憶しやすくするために、いろいろな方法も考案された。そういった方法を以前七つのアプローチに分けてみた(カイザー 1998a: 32参照)。

本稿ではその中で漢字の形・義を漢字の構成要素の分析・再構築によって記憶し、語句または語句+イメージによる、いわゆる記憶術からヒントを得ている方法を取りあげ、その特徴と問題点について見ていく。カイザー(1998a: 32)のいう第3のタイプがこのアプローチに属するものといえる。

記憶術は古くからヨーロッパから行われており、また中国にも伝統的な方法が存在する。

これらのアプローチや1970年代から心理学などで外国語語彙習得の方法として研究が進められている「キーワード法」などとの関連も視野に入れながら話を進めることにする。

2. 欧米や中国における伝統的な記憶術

2. 1 欧米における記憶術

記憶術はヨーロッパなどで古くから行われており、多くの発明と同様、古代ギリシャに遡るといえる。紀元前264年の代理石板、「パロス年代記」などでは、紀元前556-468ごろ生きた詩人シモニデスをその発明者としている(イエイツ著玉泉監訳 1993: 52-53)。

(1) …シモニデス、記憶補助方法の発明者、…

紀元前400年ごろの『談論』(Dialexeis)という断片の中で、記憶に関する次のような記述がある。第一に、注意を払うことと、第二に復誦すべきことの重要性を説いてから、次のように続く。

(2) 第三に、耳にすること君の知っているものの上に配置すべし。たとえば、Χρυσος(π
πoσ [クリシッポス]を覚えんとするならば、それをΧρυσοςoσ [金]とiππoσ [馬]
の上に置く。(イエイツ 1966/1993: 54)

つまり、ローマ字で示すなら、Chrysisposという未知の名称を覚えるためには、既知の語彙であるchrysis(黄金)とhippos(馬)という有意味の音列によって覚えると覚えやすくなるという。

同じシモニデスが、キケロの『弁論家について』(De Oratore)に登場する。宴会の最中に呼び出されている間宴会場が崩れ、客が一人残らず瓦礫の下敷きになり、身元の確認もできないほど押しつぶされてしまったが、シモニデスが客の座っていた場所を覚えていたので、全員確認できたことから、記憶術の原理を思いついたという。以降、自分の記憶にある建物など場所(loci)に記憶しようとする項目を配置することによる記憶の整理・イメージ法が古代から現代まで代表的な方法

となっている。この方法は、例えばマッテオ・リッチが中国語で著した『記法』にも「記憶の宮殿」の形で使われた。

作者不明の『ヘレンニウスへ』（紀元前86-82年ごろ）の中では、イメージ化の方法について具体的に述べられている。少し長くなるが、本題に関係のあるところを引用する。

(3) …日常生活においては、陳腐で見あきた、つまらない事物を目にしても、大抵覚えていられないものだ。というのも、心が何か新規で街外れのものによってかき乱されるわけではないからである。これに反して、もし、途方もなく卑しいとか、不名誉であるとか、異常であるとか、偉大であるとか、信じ難いとか、馬鹿げているとかいうものを見たり聞いたりした場合は、それを長い間覚えているのが普通だろう。…日常的な事柄はあっさり記憶から脱落するが、強烈で新奇なものは長く心に残るという理由以外によっては説明のつかないことだろう。

従って、われわれは、記憶にもっとも長く留まる種類のイメージを設定すべきなのである。そのためには、それぞれについてできるだけ目立つ姿をしたものを確保すること。雑然とはやくけたイメージではなく、力あるイメージを置くこと。それらのイメージに、並外れた美もしくは極端な醜さを付与すること。イメージのいくつかを、たとえば、王冠とか紫衣などで飾り、姿かたちがより目立つようにすること。あるいは、イメージをなんらかの方法で、たとえば血で汚すとか泥をなすりつけるとか赤絵具を塗りたくるとかして醜くし、その姿をより目立つようにすること。なお、何らかの喜劇的印象をイメージにつけ加え、より確実に思い出しやすさを狙うことも考えられよう。…（イエイツ著玉泉監訳 1993: 30-31）。

つまり、イメージが強烈であればあるほど記憶に焼き付くという。また、記憶術のイメージ化については、教師が学生にイメージを作る手順を教え、二、三の具体例を与えてから、今度は学生が自分自身で作るように仕向けるべきという（同：32）。

その後、記憶術の本などに上記のギリシャ・ローマの伝統的なやり方がそのまま継承されてきたといってもよい（例えば、Roth 1918やLorayne & Lucas 1974など）。

ただ、記憶術使用の目的は、時代と共に変わった。ギリシャやローマでは雄弁術が中心だった。それには、「事柄の記憶」と「詞の記憶」を区別していたが、後者の方が逐一覚える方法としてよりたいへんとされた。後世では数字や史実などの勉強目的に移るが、いずれの場合にも無意味な、あるいは抽象的な長い系列を整理し、具体的な意味を与えることによって覚えやすくすることを目的としている。

2. 2 中国における伝統的方法：漢字の学習法

2. 2. 1 漢字の学習法

中国では、伝統的な児童向け、また後には書記や官僚の資格試験のための漢字習得書が紀元前か

ら知られている。後世のものも含めると、代表的なものは『急就篇』(前1世紀)や『千字文』(5世紀ごろ)で、漢字を有意味の字句にまとめてリズム・押韻を駆使して並べ、暗記しやすくしたものである。ここでは、七字句を中心に意味上関係のある項目を韻文にまとめている『急就篇』から例をあげる。

(4) 急就奇觚与衆異

羅列諸物名姓字

上記は『急就篇』の冒頭の句であるが、「觚」というのは一本の木を三面あるいは四面の木筒として使えるもので、当時の人達はそれを手習用に使っていたらしい。一行めの意味は「速成版のこの素晴らしい觚はそこらへんのものとは違う」という意味である(阿辻 1989: 230)。

以降、二行めで言っているように、「諸物の名」や「姓字」などが「羅列」されている。例えば、次のような具合である。

(5) 量丈尺寸斤兩銖

取受付子相因縁

字形を分析せず、一定の長さの字句に配列している点では意味・場面中心のアプローチにも近い。しかし、一方ではリズムや押韻を利用しており、その意味では記憶術に利用される、語句などによる記憶術(「覚え話し」や「唱え言葉」など)と共通した部分はある。

2. 2. 2 学問における記憶法

中国では、科学試験やその他の学問の勉学には伝統的に暗唱用詩歌(中国語では、「歌訣」)を用いていた。例えば、12世紀の半ばに鄭樵という人が書いたものが残っているが、それを見るとその事情がよくわかる。

(6)・・・天体図は写し伝えられるたびごとに誤解が付け加わり・・・いかに懸命に図表を調べたところで、それに信頼を置くことはできないのだ。そこで、『歩天歌』を毎日詠唱して暗記するのが最上の策なのである。清水を貼ったように澄みきった秋の月のない夜に始めるがよい。歌の一節を唱えながら夜空を見上げてあれこれの星を確認なさい。そうして幾夜かを過ごせば、あなたの胸中に完全な天体図ができあがることだろう。(ニードム著中岡 [ほか] 訳 1981: 54)

上記の『歩天歌』について、杜 [他] 著川原 [他] 訳1997: 313に次のような説明がある。

(7) 天文学知識の発展と伝播にしたがって、『歩天歌』など通俗的な天文学の著作も出現した。

『歩天歌』は唐初の王希明の作になり、7字1句の詩歌の形式をもって、陳卓の星図の283の星官（星座）と1464個の星を紹介する。星官のシステムは全天を31の天区に分け、天区ごとに星図を描き、星図と詩歌を互いに配合している。詩を読みながら星図をみれば、あたかも身を星空に置くがごとき気分させる。それは優秀な科学的詩歌の作品であり、文芸の形式で科学知識を紹介した初めての著作ともいうことができる。

上記の二つの引用文、矛盾した点も多少あるが、「歌訣」がどんなもので、どう使われたかは大方理解できる。他にも、例えば航海技術（ニーダム著、坂本〔ほか〕訳 1981: 243参照）や錬金術（Needham 1980: 261）などに「歌訣」が使われた。

2. 3 日本における伝統的な学習方とその現代版の例

日本でも、古くから漢字の学習に『千字文』が使われたことは、平城京や藤原京の遺跡から『千字文』の語句を書いた木簡が出土していることから分かる（阿辻 1989: 157）。四書五経など漢文中心の学習内容はその後も長い間変わらないが、一般庶民を対象とした寺小屋などでは、実用的な内容を教える必要性からいわゆる「往来もの」により、漢文調の手紙の書き方が中心となった（小林 1988: 11-12参照）。

現在の児童向けの漢字学習書の中には、中国での伝統的なやり方の日本版とでもいうべきものがある。日本語には押韻の習慣はないが、リズムを用いるやりかたである。ただ、これには後述する「覚え話し」や「唱え言葉」に意味や読みなどのキーワードを読み込むアプローチとも共通した側面をもってはいる。例えば、浜西（1983）では、各単漢字について、以下のように「五七五調句」にまとめ、覚えやすさをはかっている。

- (8) a. 音と調（意味）と結びつける
- b. 部分に分解し、意味を覚える
- c. 点画（書き順・筆順）

例を挙げると、次のような具合である（振り仮名・説明などは省略）。

- (9) 特：
 - a. 特別に／特等席で／劇を見る
 - b. この雄牛（牛偏）／目立って動き（寺）／とく（特）別に
 - c. うしへん（牛偏）に／つち（土）とすん（寸）とで／特になる

3. 外国語学習用の記憶術

記憶術を外国語語彙の学習に当てはめるのは比較的最近の傾向で、Atkinson 1975あたりから始まるとされる（例えば、Higbee 1979: 622参照）。いわゆるキーワード法（keyword method）で知られるものである。音声リンク（acoustic link）とイメージ・リンク（imagery link）を組み合わせることによって外国語語彙が覚えやすくなるという考えである。例えば、スペイン語のpato（アヒル）に米語発音のpot（鍋）が音声上近いが、両者をイメージ・リンク（鍋を被ったアヒル）によって結び付けるという方法である。外国語語彙（pato）を聞いたり見たりした時、キーワード（pot）が呼び起こされ、それによりイメージ・リンク（鍋を被ったアヒル）が思い起こされ、そこから英語のduckの記憶の取り出しが行われる（Cohen 1987: 45）。

実は、これとよく似た発想による試みが100年以上も前に、奇しくも同じ名字のアメリカ人によってなされている。1860年ころから数十年間、主として横浜居留地で英米人など外国人と日本人商人の間で使用された一種のピジン日本語（いわゆるYokohama dialect）を書き留めた書物がある。Revised and enlarged…（参考文献参照）がそれで、著者のHoffmann Atkinson（Bishop of Homocoは匿名）はこのピジンを初めて書き留めた人なので、一種の正書法を考案しなければならなかった。彼が着目したのは、英語話者にとって日本語の語彙を構成する音列が英米人にとって無意味であるために覚えにくく、不透明な点であった。彼が解決法として採用したのは、そうした無意味音列を英語として有意味音列（あるいは意味ありげな音列）に置き換える手法であった¹¹。この方法はどうもAtkinsonのオリジナルのようで¹²、たいへんユニークなものである。例えば、次のような具合である。

(10) 英語語彙	横浜（日本語）語彙	英語における「意味」
Eight	Yachts（八つ）	ヨット（複数）
Nine	Cocoanuts（九つ）	ココナッツ
Ten	Toe（十）	足指
Good bye	Sigh oh narrow（さようなら）	ため息、あ、ほそい
Tailor	Start here（仕立て屋）	ここから初めよ
Hot water	Oh you（お湯）	あ、おまえか
Church	Oh terror（お寺）	ああ、こわい

例えば、Tailor は日本語で「仕立て屋」なのだが、その音列にStart hereという、よく似た英語の有意味の音列（同時に、Tailorと意味上にも結びつくもの）を当てるなどして、覚えやすくしようとしている。あるいは、Churchに対して、「ああ、こわい」というのも、上記「ヘレンニウスへ」の「途方もなく卑しい」または「不名誉」なイメージによく合致しているといえる。

これが筆者の知る限り、外国語学習に記憶術を利用した初めての試みである（キーワード法につ

いては、セクション5参照)。

4. 欧米の漢字学習用の記憶術

4. 1 リッチの記憶術

16世紀後半から17世紀初頭まで中国で活躍したイエズス会士マッテオ・リッチはヨーロッパの記憶術を中国人に紹介するために『記法』という本を執筆した。本書はもちろん漢字の記憶だけを目的とするものではなかったが、リッチ自身が漢字の学習に利用したと思われるところはある。例えば、彼が「記憶の宮殿」にすえる最初のイメージを「武」という漢字にし、「戈」と「止」という構成要素に分け、イメージを次のように設定した。

(11) … 一人の勇猛果敢な兵士が槍を持ち、敵を狙って身構えているかたわらで、もう一人の兵士がその兵士の手首をつかみ、なんとか槍を命中させまいとしているイメージである。(スペンス著・吉田訳 1995: 51)

リッチ自身はそのずばぬけた記憶力で中国人を驚かしたりした。特に、パーティーの時に、多くの客一人一人に漢字を一字ずつ書き加えさせた結果得られた無意味の漢字連続を順番、あるいは逆順に、正確に復唱することで彼等の度肝を抜いたりした。どうも、彼は若い時から記憶術の使い手であったらしい。

リッチは『記法』で上記の『ヘレンニウスへ』の記述と同様、イメージについても言及する。生気に満ちたもので、静的よりは動的の方がよい、強烈な印象を与えるもの、人物には衣装や制服を着せるべきで、社会的地位などもはっきりさせるべきだ、などと。記憶をすえるべき場所についてもいろいろな条件をつけるが、ここでは省略する(詳しいことは、スペンス著・吉田訳 1995参照)。

4. 2 Heisigの記憶術

Heisig (1977) はキーワード法によく似た方法に伝統的な記憶術を加味した形の漢字の学習アプローチをとっている。

具体的には、下記の例「特」のように、キーワード(漢字全体の基本義、太字表記)と構成要素(字素、イタリック表記)とを区別し、ストーリーによって再構築し、両者をイメージで結び付けている(Heisig 1977: 100-101)。

(12) 246. special

特

音声上(英語の?、カイザー)の強い類似にもかかわらず、special(特別)というキーワードを以前 *specialty* (46番=専)と区別するのは問題ないはずである。なぜなら、後者には

前者にない直接的な意味合いがあるからである。いずれにせよ、ここでspecialに何か特別に高級な意味を与えておこう--例えば、殺されたりハンバーグにされたりする恐れがなくどこへでも自由に歩けるインドの聖なる牛のように。この習慣はヒンズー教のものではあるが、仏が感覚のある生物の生命をたつことを拒否するという態度はこの漢字では仏教の寺の聖なる境内に牛が置かれていることもふさわしいといえる¹²⁾。

Heisig (1977) (シリーズの一冊め) は三部からなっている(「特」は第一部の終わり近くにある)が、第一部ではいわば既成のストーリーにより基本的な要素(primitives、字素)とその要素からなる漢字が扱われている。第二部では、上記(12)のような、長めのストーリーを止め、もっと端的な「筋」(plot)による結び付けに移行していく(読者は、その「筋」を使って、自前でストーリーを考案する)。そして、第三部では、「要素」の組み合わせにまつわるストーリーなどをすべて学習者に任せる段取りとなっていて、段々学習者を自律させていく構成である。

このメソッドでは、字素とキーワードを組み合わせたストーリーを覚えたり、そしてある程度進んだ段階では、学習者が積極的に自分でストーリー(イメージ)を考え出すことになる。どのようなストーリーが有効かに関しては、著者が次のようにいう(Heisig 1977: 9)。

(13) …(次の)課題は、混合漢字を作り上げることだ。想像力と記憶がものをいうのはこのところだ。目標は、精神の目にショックを与えたり、むかつかせたり、魅惑させたり、からかったり、あらゆる方法でおもしろがらせることによって、キーワードと密接に結び付いたイメージを焼き付ける点にある¹³⁾。

つまり、なるべき強烈な印象を植え付けることによって記憶に焼き付けることがポイントだとしている点、やはり上記の伝統的な記憶術の考え方と共通している。

上記(12)ではそのようなアプローチが必ずしも明確に現われていない(「ハンバーグにされたりする」程度である。「牛」の項目を例(14)にとると、「からかったり」などの性質がもっと理解しやすい。

(14) これを、ロードローラーにひかれたばかりの牛の落書きと見立てたらどうか。最初の二画の小さい点が片側に回った頭で、次の二画が四本の脚¹⁴⁾。

Heisig (1977) の副題は「漢字の意味と書きを忘れないための完結なコース」となっているが、著者自らもいうように、「この本…がしてあげられないこと」の中に、「漢字のいろいろな読み方についてもふれられていない」(Heisig 1977: 5)。

全体の構造では、読み方はHeisig (1987) という、シリーズの二冊めに任されている(因みに、三

冊めは上級者向けで別の内容となっている)。ここでは、音読みと訓読みが大きく分けてあるが、前者のウエイトが大きい。2章・5章・7章ではそれぞれ「純粹グループ」・「準・純粹グループ」・「混合グループ」を扱い、表音性（音符による規則性）によってグループ分けをしているが、その他では「仮名が由来とする漢字」(1章)、「厶」・「米 [べい]」「別」などのよに「一回しか常用漢字に現われない音読みの漢字」(3章)、「音読みをもたない漢字」(4章)、「日常的語彙の漢字」(「医者」「東京」など、6章)などが収められているが、上記の「特」はこの「日常的語彙の漢字」に次のような形で入っている (Heisig 1987: 137)。

(15) 特 トク 1440 246
1065 特別 とくべつ special

1065は通し番号で、246は一冊めへのリファラーだが、1440は二冊め内部でのリファラーで、引いてみると、「混合グループ」にも出ていることが分かる(「詩・待・等・特」という不規則なグループとして)。

4. 3 Rooにおける記憶術

De Roo (1980) は部首にたよらない独自の検索システム(副題のFast visual indexはそのシステムを指している)を考案しており、牛偏(その他の形態の似た部首・字素)は24というグループに収められている。本文でその所属字を調べると、果たして86頁に「特」に行き着く。本書は、連想情報も使用している(副題のAssociation methodである)。そのために使っている原理をイントロダクションで次のように説明している。

- (16) 1. 字素や漢字は特定の場面を呼び起こすもので、そこから意味(複数)や第二義的意味が引き出される。
2. ある漢字が他の漢字の部分になっている場合、通常意味よりも場面のほうが優勢である。⁽¹⁾

それでは、実際の説明がどうなっているか、「特」の場合を見てみよう。

- (17) …トクspecial (寺では牛、牛偏=母性のシンボル・他の動物の代表・人はそれに生まれ変わることができる、のspecialな扱い方を教えている) 専1548殊3164⁽²⁾。

構成要素に分解した上で、一つの場面にまとめ上げる点では上記 Heisig (1977) とよく似ているが、説明ははるかに簡潔である。それから、Heisigが強調するような、ショックや面白可笑しさを

どは認められないという違いもある。一方、牛偏という字素について、「牛」の項目 (cow, bull, ox, cattle としか出ていない) そのものにならぬような、「特」字の「特別」という内容を詳しく説明している。「特」字には上記 (17) の説明の 2. も当てはまる (両方の字素が独立した漢字ともなる) ことから、「意味よりも場面のほうが優勢である」という意味が理解されよう。つまり、意味的組み合わせ (寺の牛) などより、場面によるリンク・連想となっているのである。

4.4 Henshall における記憶術

Henshall (1988: 237) で同じ「特」字の扱いを見ると、上記 Heisig (1977) や De Roo (1980) の説明文よりもかなり長くなっている。

(18) 760 特 TOKU

SPECIAL

いくらか不透明だが、要素は明らかに牛・雄牛 97 番と寺 133 番である。ある学者は要素が会意で組合わさっているとし、寺の境内の牛と解釈する。犠牲のために使われたそのような動物は通常雄牛で、しかも優れた質の、即ち特別な雄牛であった。他の学者は寺を音符とみなし (男・武士の意味の土に代わるものとして、当時の発音はいずれも SHI であったため)、雄の牛、つまり雄牛としている。その説では、「特別」は仮借となる。しかし、その説では「特」と表外漢字で「土」を構成要素とする「牡」の違いが説明されておらず、またなぜ三画の「土」を六画の「寺」(これは「雄」の意味と無関係でもある) と置き換える必要があったのかもはっきりしない。中国語では 760 番が以前として雄牛や雄の意味があることも参考になる (最初の説を指示した場合、後者 (雄牛) の意味は雄牛の連想義になると思われる) ¹⁸⁾。

Heisig の場合と違い、Henshall はいろいろな字源説を紹介し、その善し悪しを議論する。ただ、残念ながら、どの説がどの研究書によっているかは明らかにしていない (巻頭の謝辞でいくつかの参考書は挙げてはいるが)。上記の説明では、「牡」が「土」を構成要素とする説明があるが、甲骨文の形を参考にすると、明らかに「土」でも「土」でもなく、雄牛の性器の形になっている (例えば、白川 1994 参照) ことが、この手の字源説の限界を示している。

Heisig や De Roo と違うのは、文中にキーワードと構成要素を組み込んだりせず、最後に一つの記憶補助句にまとめるやり方である。

(19) 記憶補助句：特別の雄牛、寺におくられる ¹⁹⁾。

記憶補助句に読み込んであるのは SPECIAL という、字全体の基本義と、BULL、TEMPLE とい

う構成要素のそれぞれ英訳で、それらが適当な動詞 (SENT TO) などを加えることによって一つの意味のある語句にまとめられている。

イメージについては特に言及がなく、むしろ言葉だけによる記憶術、いわゆる sentence mnemonics により近いのである (下記5参照)。

4. 5 日本の日本語教育の漢字学習用の記憶術

上記の英語による記憶術のアプローチの最大の欠点は、漢字の意味と構造 (書き方) は覚えられるが、日本語としての発音 (「読み」) に関する情報がない点である。つまり、この方法はキーワード法と違って、目標言語の音声は一切使用せず、単漢字の分解・再構築により漢字の形を再現でき、その基本義を思い出せることに終わり、発音や語彙要素としての役割は後回しにしている点が問題となる。

それに対し、媒介語 (英語) ではなく、目標言語 (日本語) を使った同様の方法が酒井 (1995) で提唱されている。例を挙げる (酒井 1997: 70、図や一部の記号は省略)。

(20) 美→大きい羊は美しいです

特→お寺にいる牛は特別です

上記英語による語句とよく似た発想で、構成要素 (大・羊、寺・牛) が日本語で読み込まれているが、漢字全体の音・調が示されているだけでなく、「特」の場合には、語彙構成要素としての使い方で示されている。もちろん、日本語としてのすべての読み方を読み込むわけにはいかないし、また教育上複数の読みを一度に提出することも問題があろう。ただ、いわゆる「読み替え」が後になってどのような形で扱われるかは明らかにされていない。

いずれにせよ、日本語の音声を読み込んでいる点では、英語のみによる方法よりは一步前進しているといえる。

5. 記憶術の有効性について

5. 1 キーワード法の有効性について

Atkinson (1975) や Atkinson & Raugh (1975) の当初の実験では、キーワード法が丸暗記などよりかなり有効である結果が得られた。前者では、5日後のテストでは、キーワード法を使った被験者は刺激語彙の72%覚えていたのに対し、統制群は46%しか覚えておらず、また6週間後でも43%対28%という差だった。但し、個々の語彙では、有効なキーワードとあまりそうでないものは認められた。

しかし、この方法があまり効果的でないことを示す研究もある。Wang & Thomas (1992) が漢字について同様の方法で実験を行った結果、いずれの場合にも、二日または一週間語の成績がリハー

サルによる丸暗記より悪かった。ただし、この実験ではイメージリンクを研究者が被験者に与えており、自己生成ではなかった。

McLaughlin Cook (1989) のレビューによると、一般的にはイメージを使った方法は言葉のみによる覚え話 (sentence mnemonics) より有効であり、特に具体性の高い項目に向いているという。また、Hulstijn (1997: 208) で紹介されている Levin et al (1992) の4つの実験でも、イメージと覚え話による方法が比較された。実験では、例えばgunnel (=魚) という疑似単語が二つの条件で提示された。1、文章の中で (The pole broke when the powerful gunnel took the bait¹⁰⁰)、2、キーワード法として (近似の音声gun “鉄砲” による音声リンクとして、また漁師の竿が鉄砲の形で示されたイメージで提示された。いずれの実験にもキーワード法の方が効果的である結果を示した。

5. 2 奇怪なイメージのほうが有効か

Higbee (1979: 618) の先行研究のレビューによると、日常的なイメージより奇怪なイメージのほうが有効であることは実験上支持されない。ただ、ありふれたイメージよりは新規で、ビビッドなものの方が有効であることを示す研究はある (Higbee 1979: 617参照)。

5. 3 与えられたイメージ対自己生成イメージ

Atkinson (1975: 824-825) は、(成人) 学習者にキーワードを与えるのがよいが、イメージは本人が考えたほうが有効だと言っている。『ヘレンニウムへ』などの記述以来、この方法にある程度慣らした上で学習者に考案させるのが最適だという意見が支配的である (上記Heisig1977もその一人である)。

実験の結果からも、自己生成のほうが支持されるが、児童や青年などで生成能力が未発達の人、またイメージ化能力の低い個人にはイメージを提示したほうが有効である (Higbee 1979: 619, McLaughlin Cook 1989: 12)。それから、初心者の場合にも教師が提示したほうが有効であることを示すデータがある (Hulstijn 1997: 218)。

5. 4 発音に干渉が見られるか

この点に関して言及されることがほとんどないが、Atkinson (1975: 827) が語学教育のエキスパートの意見を引いて、むしろ、正確な発音が促進されるという。その根拠として上げているのは、キーワード法が音声教育によく使われるミニマル・ペアと共通した側面がある点である。

その一方では、発音に多少干渉が見られたとしても、語彙習得率が相当上がるとすれば、キーワード法の使用が正当化されるという。

いずれにせよ、この点について実験による裏付けが今後期待される。

本研究は平成10年度文部省科学研究費基盤研究(A)(試験)(課題番号07558148)、研究代表者カイザー、シュテファン)・基盤研究(B)(2)(課題番号08458054、研究代表者カイザー、シュテファン)の助成を得た。

注

- (1) 同様の試みは初期西洋人による日本語語彙集などに多少見られる(Kaiser 1994: 46参照)が、ごく一部の語彙にすぎない。
- (2) The Japan Weekly Mail (Nov. 22, 1873)の書評でも、「氏のまったくオリジナルな、ヨコハマの音声を英語語彙に移す手段…」(His purely original expedient for the transfer of Yokohama sounds into English vocables…)と、この方法の新規性を強調している。
- (3) Despite the strong phonetic similarity, there will be no problem keeping the key-word **special** distinct from the character we met earlier for specialty (Frame 46), since the latter has immediate connotations lacking in the former. Anyway, let **special** refer to something in a **special** class all its own-like the sacred cows of India that wander freely without fear of being butchered and ground into hamburger. Though the practice is a Hindu one, the Buddha's refusal to take the life of sentient beings makes it only fitting that the cows should be placed on the sacred grounds on a *Buddhist temple* in this kanji.
- (4) …the task is to create a composite ideogram. Here is where fantasy and memory come into play. The aim is to shock the mind's eye, to disgust it, to enchant it, to tease it, or to entertain it in any way possible so as to brand it with an image intimately associated with the key-word.
- (5) Why not see this as a “doodle” showing a **COW** that has just been run over by a steamroller. The small *dot* in the first stroke shows its head turned to one side, and the next two strokes, the four legs.
- (6) 1. Graphemes and kanji evoke specific SITUATIONS from which meanings and connotations are drawn.
2. The situation, rather than the meaning, is often dominant when one kanji is part of another.
- (7) …TOKU special (the temple 寺 1448 teaches special treatment for cows 牛偏 2455=symbol of motherhood: representative for other animals; people can be reborn in them) 専 1548 殊 3164
- (8) Somewhat obscure, though its elements are clearly **cow/bull** 牛 97 and **temple** 寺 133. Some scholars take the elements to be used ideographically, giving **cow/bull in temple grounds**. Such a creature, which was kept for sacrifice, was usually a bull, moreover a

bull of outstanding and thus special quality (see also sacrifice 犠 1140). Others take 寺 to be used purely phonetically to express male (as an alternative of male/warrior 士 494, both characters having the same pronunciation SHI at the time), thus giving male cow, i.e. bull. Special is then taken to be a borrowed meaning. However, this theory does not account for the difference between 特 and the NGU character bull/male 牡, which does use male 士, nor is it clear why there should be any need to replace the tree-stroke character 士 with the six-stroke 寺, especially since the latter has no intrinsic semantic relevance to the concept of male. Note that in Chinese 760 can still mean bull and male (the latter presumably being an associated meaning of bull if the former theory is followed).

(9) Mnemonic: SPECIAL BULL SENT TO TEMPLE

(10) 力強いガンネルが餌をとった時、竿が折れた。

参考文献

1. Atkinson, Richard C (1975) "Mnemotechnics in second-language learning". *American Psychologist*, August 1975: 821-828
2. Atkinson, Richard C, Raugh, Michael R (1975) "An application of the mnemonic keyword method to the acquisition of a Russian vocabulary". *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory* 104: 126-133.
3. Cohen, Andrew C (1987) "The use of verbal and imagery mnemonics in second-language vocabulary learning". *Studies in Second Language Acquisition* 9: 43-61.
4. De Roo, Joseph R (1980) *2001 Kanji: Structure analysis, association method, fully cross-referenced, fast visual index*. Tokyo: Bonjinsha.
5. Heisig, J W (1977) *Remembering the kanji: a complete course on how not to forget the meaning and writing of Japanese characters I*. Tokyo: Japan Publications Trading Company.
6. Heisig, J W (1985) *Remembering the kanji: a systematic guide to reading Japanese characters II*. Tokyo: Japan Publications Trading Company.
7. Heisig, J W & Sienko, Tanya (1994) *Remembering the kanji III: Writing and reading Japanese characters for upper-level proficiency*. Japan Publications Trading Company.
8. Henshall, K (1988) *A Guide to remembering Japanese characters*. Tuttle.
9. Higbee, Kenneth L (1979) "Recent research on visual mnemonics: Historical roots and educational fruits". *Review of Educational Research* 49/4: 611-629.
10. Hulstijn, Jan H (1997) "Mnemonic methods in foreign language vocabulary learning: Theoretical considerations and pedagogical implications". In James Coady & Thomas Huckin (eds) *Second language vocabulary acquisition: A rationale for pedagogy*. Cambridge University Press,

11. Kaiser, Stefan (1994) *The Western rediscovery of the Japanese language. Vol. 1: Introduction.* London: Curzon Press.
12. Lorayne, H, Lucas, J (1974) *The memory book.* New York: Stein & Day.
13. McLaughlin Cook, Neil (1989) "The applicability of verbal mnemonics for different populations: a review". *Applied Cognitive Psychology* 3, 3-22.
14. Needham, Joseph (1980) *Science and civilisation in China* Vol. 5, Part 4. Cambridge [Eng.] : Cambridge Univ. Press
15. *Revised and enlarged edition of Exercises in the Yokohama Dialect. Twenty second thousandth. Revised and corrected at the special request of the author by the Bishop of Homoco.* Yokohama 1879. Printed at the "Japan Gazette" Office, No.70, Main Street.
16. Roth, D M (1918) *Roth memory course.* New York: Independent Corporation.
17. Wang, Alvin Y, Thomas, Margaret H. (1992) "The effect of imagery-based mnemonics on the long-term retention of Chinese characters". *Language Learning* 42: 3, 359-376.
18. Yates, F (1966) *The art of memory.* London: Routledge & Kegan Paul.
19. 阿辻哲次 (1989) 『図説漢字の歴史 (普及版)』 大修館書店
20. イエイツ、フランセス・A著玉泉八洲男監訳 (1993) 『記憶術』 水声社
21. 小川環樹 (1981) 『中国の字書』 貝塚茂樹・小川環樹著 『中国の漢字』 日本語の世界第3巻 中央公論社
22. カイザー、シュテファン (1998a) 『漢字学習書各種アプローチの検討 (2) 一字形アプローチ : 形音義の狭間』 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 13号 47-60
23. ——— (1998b) 『Yokohama Dialect—日本語ベースのビジナー』 『東京大学国語研究室創立百周年記念国語研究論集』 久古書院 (83) 1258-1235 (106)
24. 小林一仁 (1988) 『漢字教育の歴史』 佐藤喜代治編 『漢字講座=12』 明治書院 11-42
25. 酒井順子 (1995) 『東京外国語大学留学生日本語教室センター』 川口義一・加納千恵子・酒井順子編 『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』 創拓社 55-108
26. 杜石然他編・川原秀城他訳 (1997) 『中国科分技術史』 東京大学出版会
27. 白川静 (1994) 『字統』 平凡社
28. スペンス、ジョナサン著・古田島洋介訳 (1995) 『マッテオ・リッチ記憶の宮殿』 平凡社
29. ニーダム、ジョセフ、中岡哲郎 [ほか] 訳 (1981) 『中国の科学と文明』 第8巻 思索社
30. ニーダム、ジョセフ、坂本賢三 [ほか] 訳 (1981) 『中国の科学と文明』 第11巻 思索社
31. 浜西正人 (1983) 『浜西式角川漢字学習字典丹波』 角川書店